【第六九回研究例会　〈怪異〉の聞き方・書き取り方—〈口承〉研究の視点から】

学校の怪談と都市伝説

大島　廣志

近代の記録

「〈怪異〉の聞き方・書き取り方—〈口承研究〉の視点から—」というテーマなので、学校の怪談を中心に口承文芸関係者の記録から、〈怪異〉の書き取り方について探ってみようと思う。学校に出現する怪異についてのもっとも古い記録は、佐々木喜善の『奥州のザシキワラシ』（一九二〇　玄文社）に収められている岩手県遠野の次の話であろう。

①土淵村字本宿に在る村の尋常高等小学校に、一時ザシキワラシが出ると云ふ評判があつた。諸方からわざわざ見に来たものである。児童が運動場で遊んでをると、見知らぬ一人の子供が交つて遊んでゐたり、また体操の時など、どうしても一つ余計な番号の声がしたと云ふ。それを見た者は、常に尋常一年の小さい子供らの組で、其等が其所にをるなど、云つても、他には見えなかつたのである。遠野町の小学校からも見に来たが、見た者はやつぱり一年生の子供等ばかりだつたさうである。毎日のやうに出たといふことである。明治四十五年頃の話である。

続いてこの遠野町の小学校に出現した「ザシキワラシ」の記述がある。

②二十四五年も前のことであろうか。毎晩九時頃になると、一人の白い衣物を着た六七歳の童子が、玄関から入つて来て教室の方へゆき、机椅子などの間を潜つて楽しさうに遊んでをる。かぶきれ頭であつたと云へば、多分ザシキワラシであつたらうと思ふ。いつか友人の伊藤といふ人から聞いたことがあつた。

この二つのザシキワラシの話は、数あるザシキワラシ譚に分類できるものであり、特に学校という場が意識されているわけではない。

③明治末年、鹿児島県種子島の野間小学校に夜毎濡れ嫁じょう（洗い髪の女）が現われたという（下野敏見氏の回答）。[1]

④一九二二年のころ、徳島県立農業高校の寄宿舎から火の玉が見えた（多田志津夫氏の回答）。

⑤昭和初期、島根県松江のある寄宿舎に、夜中盆踊り歌をうたう亡霊が現われた（浅沼博氏の報告）。

⑥一九三二年ころ、広島県の旧制中学の寄宿舎に、夜中結核で死亡した生徒の霊が図書館の机に座っていた（佐々木哲朗氏の回答）。

⑦一九三五年ころ、福井県福井市の女子師範学校に、夜中

首をつって死んだ女子学生の幽霊が現われた（藤井則行氏の回答）。
①〜⑦までは、ザシキワラシ、火の玉、妖怪、亡霊など、従来から語られていた伝承的怪異が学校という場に現われたという話である。この傾向は一九三五年以降も続く。
⑧一九三七年ころ、岩手県釜石市のある小学校のプールで、夜プールで死んだ子どもが泣くといい、それは座敷ぼっこが泣いたとか、座敷ぼっこが出てきて死んだ人達の霊を慰めたと伝わる（傍島昭子氏の回答）。
⑨一九三七、八年のころ、福島県会津若松市の鶴城小学校に、夜になると運動場に鬼火が燃えるという噂が流れた（竹内智恵子氏の回答）。
⑩一九三八年のころ、山形上山市上山小学校に、うす暗くなったころ中二階の教室に行くとノッペラボウが出た（武田正氏の回答）。
⑪一九四〇年のころ、兵庫県池田小学校に、夜宿直していると鎧を着た人たちが歩く音がした（有末省三氏の報告）。
この⑧〜⑪までは、座敷ぼっこ、鬼火、ノッペラボウ、亡霊の出現で伝承的怪異に属する。しかし、この時期は学校の怪異に少なからずの変化が起きている。特に学校の便所では、従来の話柄とは異なる話があちこちで語られていた。
⑫一九三六年のころ、長野県南安曇郡豊科町豊科小学校での話。学校のお便所に入ろうとするとマントを着た男の人がいて、「赤いマントがほしいか、青いマントがほしいか」と聞く。「赤いマントがほしい」と答えると、ナイフで刺され、真赤な血に染まって死に、「青いマントがほしい」と答えると、体中の血を吸われ真っ青になって死ぬという（塩原恒子氏の回答）。
⑬一九四三年のころ、静岡女子師範学校での話。トイレに入って紙がなくて困っていると、どこからか、「青い紙がいいか、赤い紙がいいか」という声が聞こえてきたので、「赤い紙がいい」と答えたら、その人は真赤に染まって死んでしまったという話です。学校での噂です。（吉田香奈江氏の回答）。
⑭一九四三、四年のころ、岡山市内の旧制中学の寄宿舎でのこと。夜、便所にいったら天井の方から、「白い手がいいか、赤い手がいいか、青い手がいいか」という声が聞こえて、冷たいものにお尻を触れられたという。あとで調べてみると、以前その便所で寄宿生のひとりが首つり自殺をしたことがわかったという（山内靖子氏の報告）。
「赤いマントがほしいか、青いマントがほしいか」「青い紙がいいか、赤い紙がいいか」「白い手がいいか、赤い手がいいか、青い手がいいか」などという声が便所に入っている時に聞こえるというモチーフは従来の伝承的怪異を語る話にはなかったものである。時代の状況とモチーフがどうリンクしているか定かではないが、「赤い紙」が恐ろしいというのは、一九四一年に太平洋戦争に突入した日本人にとって「赤紙」（軍隊の招集令状の俗

称）とかかわるかもしれない。便所の「赤い紙」の恐怖は今日まで続き、学校便所の定番にもなっている。なおこの話については常光徹氏が『学校の怪談』（一九九三　ミネルヴァ書房）で詳しく分析している。

大正時代から昭和前期の学校を場とした話を掲げてきたが、注目できるのは④⑤⑥⑦⑬⑭に傍線を施した師範学校の寄宿舎や旧制中学の寄宿舎や高校の寄宿舎である。各県に置かれた師範学校寄宿舎の怪談の場の一例を掲げる。

⑮「青森師範の七不思議」わたしは昭和十六年青森師範学校に入学し、昭和二十二年三月に卒業した。この七不思議の怪談は、昭和十六年の一年生から十七年の二年生にかけて、上級生から聞いた話である。（中略）。師範学校は全寮制度であった。小雨の降る夜、上級生の室長が、ローソク一本を灯もして、じわじわとこの学校の怪談を聞かせてくれる。そして、その後暗い学校のどこかへ行って来なければならないのである。「試胆会」といわれた。[2]

師範学校は全寮制だから学生は皆寄宿舎に入り、そこで「試胆会」の洗礼を受ける。青森師範では「十三階段・あかずの便所・血染めのカヤ・鳴り出すピアノ・アミダ寺の怪」が七不思議として語られていたという。「アミダ寺の怪」とは、一般に「見たなぁー」と呼ばれている話で、これは山形師範学校、福井師範学校、旧制岡山第一中学校の寄宿舎でも語られていた。[3] 遠隔地の学校で同じ内容の話が語られているということは伝播する要因があったと考えられる。師範学校の卒業生の大半は学校の教員となった。任地の学校で「試胆会」の怪異もしくはそれに類した怪異を語ったであろうことは想像に難くない。「試胆会」とはいわゆる「肝だめし」の漢語的表現であり、一九一五年の『日本少年』一二月号に松山思水の「試胆会」という童話が掲載されている。まだ読む機会はないが、大正初期にはすでに使用されていた語といえる。[4]

師範学校に限らず、旧制高校でも「試胆会」は行われていた。

⑯旧制姫路高校の寮は白陵寮といって六棟がきちんと並列し、部屋数は全部で六十、一棟一棟の間は渡り廊下で結ばれ、間に便所があった。（中略）新入生は四月、入学するとさっそく開かれる試胆会で先輩たちの語る怪談を聞かねばならなかった。

大広間には全寮生が並び、八十本のろうそくに灯がともされる。先輩のひとりひとりが一つずつ、話をするごとにろうそくの灯は一つずつ、消されていく。夕方から始まるのだが、百近い物語とあって終わるのは真夜中、最後のろうそくがフッと吹き消されるときのこわさはいいようがない。それから暗い夜道を肝だめしに出ていくのだった。[5]

これまで示してきたように寄宿舎という学校における集団生活の場が「学校の怪談」の成立と伝承と拡散に深くかかわっていたと思われる。ではその資料の書き取り方はどのようなものであったのか。太平洋戦争以前の資料一六点のうち①②⑮⑯を

除いては松谷みよ子編『現代民話考7　学校・笑いと怪談・子供たちの銃後・学童疎開・学徒動員』（一九八七　立風書房）から引用させていただいた。昔話の調査が主流であった敗戦前の口承文芸研究にあって。枠外の学校の怪談は記録として残されることはなかった。それはどこにでもある今の話であったからである。したがって、松谷みよ子の『現代民話考7』は敗戦前の記録として貴重な書といえる。

では松谷はどのようにして数多くの学校の怪談を記録できたのか。それは民話愛好家向けの『民話の手帖』という雑誌でアンケートを取ったからである。具体的には、雑誌の中に料金受取人払のはがきをはさみ込み、毎回のテーマを提示し、いつ頃の話、事件のおこった場所、誰から、話のあらすじ、などを書いて投函してもらうというものであった。個人の聞き書きでは、全国的規模で大正・昭和前期の膨大な学校の怪談を記録することは不可能である。現在ならインターネットという方法もあり得るかもしれないが、一九八〇年代においては、それを可能にする唯一の方法がアンケートによる資料収集であったろう。高齢者からのアンケート回答が多かったところから、近代の学校の怪談の諸相が明らかになり、ここでは数多く引用させていただいた。

二、「学校の怪談」ブーム前後と都市伝説

アンケートによる書き取り方は昔話記録でも行われてきた。一九〇五年に文部省が各県に依頼してえられた報告書が最初である。その結果は現在福岡県と富山県のみ確認でき、刊行されている。福岡の分は「福岡県童話」と題されていて、一九七五年に岩崎美術社が『福岡昔話集』として出版した。これは国家的な公的アンケートの成果であって、個人では一九三三年の福島高等女学校の菊田トヨ氏の記録した昔話アンケートが最も古いのではないか。菊田氏は一九三三年の冬の課題として女子学生に「印象の深かったお話」を提出させた。それが『福島高女民話集』（一九八八年　ふるさと企画）である。一九三四年の静岡県立女子師範学校郷土史研究会編『静岡県伝説昔話集』（静岡谷島屋書店）、一九三七年の鈴木棠三編『川越地方昔話集』（川越女子高の記録。民間伝承の会）、一九四一年の武田明編『西讃岐昔話集』（丸亀高等女学校郷土研究室）、それぞれ夏季もしくは冬季休暇中の課題報告から得られた資料で、すべて女子学生の記録であることも特徴といえる。

一九三六年の柳田國男・関敬吾共編の『昔話採集手帖』（民間伝承の会）は、当初の目的は果たせなかったが、その形態は昔話収集アンケートそのものである。ある特定の話を多くの人から収集するときに、アンケートは信憑性に問題を残すものの有効な方法であることに違いはない。

一九八〇年代後半から今日まで、怪異譚を含む都市伝説資料収集にも学校で学生に回答を求めるアンケート方式が多く採用されている。気がついた著作を次に掲げる。

一九八六年　大島広志編「若者たちのこわい話Ⅰ」（『民話と

文学の会会報』四七号　民話と文学の会）全六回、専門学校の女子学生のアンケートの回答。

一九八九年　岩倉千春編「ヤングの知っているこわい話1」（『不思議な世界を考える会会報』一七号　不思議な世界を考える会）現在刊行中。岩倉の他、大島広志、常光徹、樋口淳、三原幸久、米屋陽一などの会員による資料が掲載されている。大学生へのアンケート回答が主。

一九九七年　久保孝夫編『女子高生が語る不思議な話』（青森県文芸協会出版）。編者が一九九二年から五回にわたって『大妻』（函館大妻高校）に掲載した話約二〇〇〇話の中から一二〇〇話を選んだもの。一地域の若者が語っている最大の怪異資料集。

二十世紀末の口承文芸関係者の学校での「書き取り方」は、高校生や大学生へのアンケート回答が主であった。一九八八年のジャン・ハロルド・ブルンヴァン著　大月隆寛・菅谷裕子・重信幸彦訳『消えるヒッチハイカー　都市の想像力のアメリカ』（新宿書房）刊行がきっかけとなって都市伝説収集の気運が高まり、それぞれの勤務校でアンケートを実施した結果であった。アンケート回答といっても、その伝承経路として「友だちから聞いた」というのが圧倒的に多い。つまり、アンケート回答の根底には口承という「場」が想定できるのである。

三、インターネット怪文書

今日はアンケートによる怪異・都市伝説の記録という方法とともに、パソコンのインターネットの中で話が展開する時代に入った。二十世紀末にあちこちで語られていた「日本だるま」（日本人が誘拐され、外国で手足のない日本だるまという見世物になっていたという話）は、パソコン使用者の格好のネタとなり、インターネットを通して拡散していった。また「橘あゆみの話」（暴行されて死んだ橘あゆみの恋人の男が犯人探しをし、「二四時間以内にこのメールを七人に回せ、メールを止めたら殺す」と脅迫する話）は、メールを回せというチェーンメールである。一九六〇年代から流行した幸福の手紙は幸福のチェーンメールとなり、不幸の手紙は不幸のチェーンメールとなって復活した。インターネットには「チェーンメールコレクション」というＨＰがあるほど、数限りないチェーンメールが日々発信されている。

二〇一五年一一月二八日にスマホでグーグルを検索したところ、「ゴメンなさい」の件名で次の話があった。

ゴメンなさい
困ってきたから回すね
ほおっておいたら本当にかかって
きた子がいたかんだ

お菊ちゃんからの電話がなる前に
このリンク（http://??-??/???）
を一〇人に送ってください。
送らなかったり、自分からかけた場合、

夜お菊ちゃんが電話でむかえに来るそうです。
最近いたずらメールがはやっていますが
ちゃんと回さないと、お菊ちゃんの呪いが
あなたにふりかかります
夜、お菊ちゃんがあなたの足をもぎとっちゃいます。

このチェーンメールに限らずネット上では、怖い話系、偽情報系、小話系など多数の怪文書が氾濫している。その多くは口承の「場」を経ていない創作話や引用話となっているところに、インターネット怪文書の「書き取り方」の特色がある。

四、ゴーストツアー

最後に「〈怪異〉の聞き方」についての新たな「場」を報告する。若者の間ではインターネットを通して怪異と接するのが主流となってきているが、一方で、怪異の場へ行き、怪異の語り手から直接に怪異を聞くツアーも開催されている。

島根県松江といえば『怪談』の著者小泉八雲の名がすぐに浮かぶ。その松江で八雲の曽孫小泉凡氏の提唱により、ゴーストツアーが随時行われている。松江城内から日没とともに出発した参加者は手に懐中電灯を持ち、松江城のギリギリ井戸・日照寺・清光院・大雄寺を訪ね松江城大手前で解散。小泉八雲の再話した「怪談」ゆかりの地で参加者はガイドの語る「怪談」を聞くという二時間のツアーである。

アイルランドのダブリンではゴーストバスが走り、車内で怪談を聞いてその場所に行くツアーがあり、イギリスのロンドン、エストニアのタリンにもゴーストツアーがあるという。この他にもあるだろうが、世界各地で行われているゴーストツアーの日本版としては島根県松江は最適の地といえよう。怪談の素地と観光とが合致する地域においては、松江以外でも今後増えていくのではないか。東京都内もゴーストツアーの成立する地域であろう。

一方でインターネットというバーチャルな「場」での怪異譚の拡散があり、また一方では対面する語り手から怪異譚を聞いて楽しむ「場」が立ち上がっているというのが、今日の状況である。

※本稿は二〇一五年十二月五日に國學院大学で行われた日本口承文芸学会研究例会での口頭発表に一部手を加えたものである。

注

（1）③〜⑭は松谷みよ子編『現代民話考7　学校　笑いと会談・子供たちの銃後・学童疎開・学徒動員』（一九八七　立風書房）による。回答はアンケートの回答。報告は編者の書物からの引用。すべて筆者が要約して載せた。
（2）北彰介編『青森県の怪談』一九七二　青森県児童文学研究会
（3）注（1）に同じ。
（4）鳥越信編『日本児童文学史年表1』一九七五　明治書院
（5）松谷みよ子・瀬川拓男編『現代の民話』一九七四　角川書店

（おおしま・ひろし／國學院大學）